

銀賞受賞作品

キミに捧げる物語

上村夏樹



アナタが笑ってくれなくなってから、毎日が退屈なの。

——キミ、とても悲しそうな顔をしている。

世界は瞬く間に色を失い、モノクロになってしまった。

——目は虚ろだし、顔もどこか青白い。

呆れるほどに、アナタとの日常が恋しい。

——ごめん。

感情はあるはずなのに、どうして表情だけが消え失せたのか。

——何もできない自分が悔しい。

元気に走り回ってなんて贅沢は言わないから。

——キミのために、何ができるのだろうか。

もう一度笑って見せてなんて言わないから。

——それはたぶん、生きている証を見せること。

だから、お願い。

——どうして何かしようって思うのだろう。そんなの決まってる。

せめて、泣いてはくれませんか？

——大好きなキミに、笑顔を咲かせたいから。

ありつただけの想いを言葉に込めた。

祈るような気持ちで強く、強く——



小さい頃から、私と水沢健二は一緒だった。

彼とは家が隣同士で同年。暇さえあれば二人でよく遊んでいた。

といっても、私も彼も活発な子どもとは言いがたく、もっぱら室内で読書をしたりおしゃべりを楽しんだりしていた。日野陽子なんて元気のありそうな名前を持っている私だけど、完全に名前負けしている。

あまりにも仲が良すぎて、近所のおばさんに「陽子と健二はいつも一緒にいるわねえ。まるでおしどり夫婦じゃない」とからかわれたこともあったっけ。

私は顔が熱くなるほど恥ずかしかったけど、健二は冗談で返すくらいには余裕があった。私だけあたふたして馬鹿みたい。

だけど、不思議と嫌な気持ちはしなかった。

私たちはよく本を読む。

健二は推理小説が大好きだ。私もミステリーはそこそこ好きだけど、健二ほどじゃない。それに、私はドラマチックな恋愛小説が好きなのだ。

今でも続けているけど、私たちは読書感想交換ノートというものをつけている。

お互いが同じ本を読んで、感想をノートに書いてそれを交換する。ときには意見が衝突することもあるけれど、健二が何を考えているのかわかる。小説の感想を交換しているだけなのに、私にとって、それが妙に嬉しくて困る。

健二がどんなことを考えているのか知りたい——言い換えれば、健二のことがもっと知りたいのだ、私は。

そんな理由で読書感想交換ノートを続けているだなんて、彼には絶対に言えない。私だけの秘密。

私たちのお気に入りの場所。

それは図書館に続く桜並木道だ。

もちろん、図書館で本を読むのが目的なんだけど、春限定であの場所は好き。桜の木が太陽に向かって元氣よく伸びている、あの道が。

目を閉じれば、満開の桜並木道がまぶたの裏で色鮮やかに蘇る。

陽の光に濡れた桜の花びらが、回転して踊りながら散っていく。ひらひらと舞う花びらを目で追いかけることに、私は夢中になる。青い空を背景にして、薄桃色の花びらは優雅に踊る。

「ねえ健二！こんなにキレイな空、見たことないよ！」

この感動を誰かと共有したい！

そう思って健二の顔を見るんだけど、彼は穏やかに微笑むだけだった。私としては一緒に盛り上がってほしかったのに。つれないヤツ。

健二は私のことをどう思っているのだろうか。ただの幼なじみで、それ以上でもそれ以下でもないのかもしれない。

だけど、私は健二に対して淡い恋心を抱いている。

桜並木道を二人で歩いているとき、いつも思っていた。

健二と手を繋ぎたいって。

健二の退屈そうな右手。私の左手がそれを掴もうとするけれど、いつもためらってしまふ。結局、触れようとした私の左手は虚しく空を切る。その繰り返し。

健二は私の気持ちに気付いてはくれない。

以前、健二が他の女の子と楽しそうにしているのを目撃したことがあった。私は嫉妬してしまい、交際相手でもないのに健二に意地悪な言葉をぶつけて困らせてしまった。

私というときよりも楽しそうだねって。

今思えば、私の気持ちに気付いてはしかなかったから、あんな可愛くないことを言ってしまったのかもしれない。

そのとき健二は「今度あの子と遊ぶとき、陽子も誘うから機嫌を直してよ」と謝ってきた。私は別に仲間外れにしないでって言っているわけじゃないのに……健二は想像以上にニブチンだった。

なんだか、ずるい……。あの優しい笑顔にいつも振り回されてばかりだ。

私は彼の笑顔が大好きだ。

顔を皺を作り、歯茎までバッチリ見えてしまうほど彼はにっこりと笑う。客観的に見れば、あまりかっこいいとは言えないけど、小動物みたいな愛らしい笑顔に私の乙女心は奪われてしまった。

十四歳になった今でも、この気持ちは変わらない。

いつからだろう。

楽しくおしゃべりをするときの彼の無邪気な笑顔。

本を大事そうに抱える子どものような横顔。

ページを捲るしなやかな指先。

昔と違って男らしくなった大きな背中。

私はいろいろな健二を目で追うようになっていた。

どれだけ想い続ければ、この気持ちは届くのだろう。

私の心に、桜咲く春の気配はまだ来ない。

——キミに捧げる物語——



「誰もが感動する小説ってあると思いますか？」

窓側の席。机を挟んで俺と向かい合って座っている文芸部部长に訊いてみた。

「ないね、そんな小説。この神崎王華が断言しよう」

俺の希望を見事に打ち砕いた返事は、部長らしいはつきりとした物言いだった。

俺が所属するこの文芸部は、俺と部長以外は幽霊部員である。部員が二人では廃部になってしまうため、部長の友人五人に名前だけ借りて、書類上は七人で構成されている。

今日は三月三十日。春休み中の今、この部室にいるのも俺と部長の二人だけ。毎日のように読書にふけったり、執筆したりしている。

とはいえ、真面目に執筆しているのは部誌が出るときだけ。四月、七月、十月、二月の年四回。それ以外の月は読書しかしていない。部長は小説コンクールに応募したりと執筆に積極的なので、少なくとも俺よりかは忙しいそうだ。

「斉木春人。君はもう少し優秀だと思っていたけれど、この神崎王華の勘違いだったかな？ いいかい、春人。そんな優れた——ある意味で悪魔的な小説があったなら、メディアが放っておかないだろう。今頃世界中で話題になっているよ」

部長は一呼吸置いて「それにね」と付け加える。

「感情というものは極めて主観的だ。小説から受け取るメッセージなんて、人によって様々だ

ろう？ ましてや『誰もが』感動する小説だ。文化も考え方も異なる世界中の読者相手に、確実に通用する普遍的な感動小説なんて、この世に存在するわけがないだろうね。この神崎王華はそう思うけれど」

部長はワイシャツの内側で窮屈そうに収まっている胸を張り、力強く言い切った。とはいえ、俺も異論はない。

わかってはいたのだ。

そんな夢みたくない小説、あるわけないって。

「そうですか……」

俺はため息混じりにそう言って、窓の外に視線を向けた。

外には数えきれないくらいの満開の桜が並んでいる。風が吹いて花びらが散れば、抜けるような蒼穹に桜吹雪が吸い込まれていく。アスファルトにはまるで花びらの絨毯でも敷かれているかのように、薄桃色で覆われていた。この景色を見るのも、入学式以来だから一年ぶりだ。

——あの桜並木道とどっちがキレイだろうか。

桜舞う景色に見惚れていると、

「気を落とすなよ、春人」

そう言って、俺の顔を覗き込む部長。彼女の黒く長い髪がはらりと揺れ動く。

「後輩の希望を踏み躪るのが楽しいんですね。部長は」

「おいおい、そりゃないよ。そんな悪趣味な真似をこの神崎王華がやるわけないだろう?」

部長は口をすぼめて抗議した。ふつくらした桃色の唇はやたらと艶めかしい。

「どうした? 何を見ている?」

「……なんでもありません」

あなたの唇を見ていましたなんて言ったら、部長は嬉々として俺をイジメてくるだろう。人に意地悪をするのが趣味な人だからな、部長は。見た目は大人のくせして、こういうところは子どもっぽい。

「……なあ、春人。何かあったのか? 君がそんなことを訊いてくるなんて……なんだか少し心配するぞ。よかつたら力になるよ?」

それでもこうして後輩を心配するあたり、やっぱり大人なのだと思い知る。

俺の言動から機微を読み取ったのか、部長は柔らかく微笑んで俺を見つめた。目を細めた部長の優しい笑顔は、桜とは別の美しさがあった。

「心配してくれてありがとうございます。でも、大丈夫です」

「大丈夫って、君の——」

「大丈夫です」

部長の言葉を遮るように、俺は語気を強めて繰り返す。

「大丈夫、ですから」

何してんだ、俺。あからさまに態度変えちまって。これじゃあ「部長、大丈夫じゃないです。かまってください」って言っているようなものじゃないか。別に慰めてほしいわけじゃないのに。

「……ふふふ」

何の前触れもなく、部長が笑った。口から自然と零れた笑みではあるが、その表情はどこか自分の才能に畏怖しているかのような、薄気味悪い笑顔である。

間違いない。これは部長が自分の才能に酔ったときの妖しい笑いだ。

去年の秋、カナガワ新聞社主催の文芸コンクールに応募する短編小説を、部長が脱稿した直後のことだ。そのとき部長は「自分の才能が怖いぞ、春人よ。ふふふ……」とか言って不気味な笑みを浮かべていた。

真に恐ろしいのはその笑顔ではない。三〇〇にものぼる応募作品の中から、部長の作品が佳作入選したという事実。部長は口だけじゃない。他人からの評価も高いのだ。

そういう前例があるため、この不気味な笑顔にも何か大きな自信みたいなのが見え隠れしていて、何だか身震いする。

「な、何を笑っているんです?」

おそるおそる部長に尋ねる。

「春人よ。いいことを思いついたぞ」

今度は目を輝かせて、自信満々な表情に変わった。嫌な予感が次々と俺の脳裏を通り過ぎていく。

「いいことって……何です？」

「ふむ。よくぞ訊いてくれた」

部長は立ち上がり、踏みつけるようにしてイスの上に足を乗せる。ダンツという小気味いい音は二人きりの室内によく響いた。

黒いニーソックスに包まれた、部長の細くしなやかな脚に見惚れていると、イスに座っている俺に衝撃の言葉が降ってきた。

「今月の部誌に載せる小説のお題は——『感動小説』だ！」

部長よ……何でそうなる。

「いや、俺は別に——」

「本件事案は既に決定事項だ。この神崎王華が決めた。今決めた」

「俺の話、聞いてくださいよ！　そもそも、今月のお題は『桜の下で待ってるあの人』じゃなかったんですか？」

「それじゃあこの神崎王華は帰るぞ。さらばだ！」

飾り気のない学生鞆を持って、早歩きで部屋の出口まで向かう部長。

「ちよっと！　待ってください、ぶちよ——」

ボタン、という音とともに俺は閉口した。もうすでに『桜の下で待ってるあの人』のお題で八割方構想が練れているというのに……俺の努力は水の泡じゃないか。

「はああ……」

嘆息し、再び窓の外を見る。もうすっかり陽が落ちていく。オレンジ色に焼けた空をバックに桜がふわりと舞い散っている。

さて、俺も帰ろう。

感動小説か……プロットのストックならいくらもある。家に帰ったら見てみるとするか。重い腰を上げて、俺は部室を後にした。

◇◇◇◇◇

今日は日曜日。

予定はすでに決まっている。

いつも本を読んではかりだけど、今日は朝一番に本を買いに行く。私の大好きな作家の新聞が出るからだ。

そして家にこもって買った本をまったり読む。まあ予定なんてたいそうなものじゃなくて、結局はいつものように読書するわけなんだけど。

春らしいクリーム色のセーターを着て、お気に入りの水色のパンプスを履いた。

よし、準備万端だ。

いざ駅前の本屋へ！

新刊よ、今行くから待っててね――

ピンポーン。

家を出ようとしたとき、インターホンが鳴った。……空気を読んでほしいんだけどなあ。こんな朝早くにいったい何の用事があるっていうの？

「はぁーい。どちらさまですかあ？」

渋々ドアを開けると、そこには満面の笑みを浮かべる健二が立っていた。

「け、健二？」

「おう。おはよう」

「おはよう……じゃなくて、どうしたの？」

「陽子！ 図書館行くぞ！」

……え？ 何だって？ そんな予定、入ってないと思ったけど……もしかして、私が約束を

すっかり忘れてしまったとか？

「ごめん。約束してたっけ？」

「いや、してないけど」

そっか。謝って損した。

「じゃあ何で急に来たの？ 私、これから本屋に行く気満々なんだけど」

「何だって、そんなのお前と遊びたいからに決まってるだろ」

恥ずかしげもなく、いつものように健二はニカッと笑った。

――とくん、と心臓の音が鳴った気がした。

「い、いきなり来るとかないでしょ。迷惑だし」

胸の奥が熱くなり、思ってもいない言葉を口にした。

本当は嬉しかった。

健二が私と遊びたいから来たって言うてくれたことが、とても。

嬉しすぎて、この気持ちが顔に出してしまうかもしれない。いや、私には隠しきれない自信がない。

私は健二に背を向けた。

笑顔を見られないように。

騒がしい胸の鼓動に気付かれないように。

「わ、悪かったよ……今日は帰る」

もしここが学校の教室で休み時間だったら、喧騒にかき消されてしまいそうなほど小さく、寂しそうな声だった。

本当、空気を読んでほしい。かつこ悪いぞ、男の子。

「待つてよ、健二」

深呼吸してから振り返る。

口をすぼめて、つまらなそうにしている健二の顔が視界に入る。

「本屋に行った後なら、予定……空いてるけど」

そう言ったときの健二の表情はとても嬉しそうで。

まるで主人が帰宅して喜んでいるときの子犬みたいだった。

待ち焦がれていた新刊を購入した。

普段、本は図書館で借りるし、もし買うとしても文庫だけど、この作家の本だけはハードカバーで買いそろえている。中学三年生の財布には優しくないけど、文庫化されるまで待つてられない。それほど好きな作家なのだ。

駅前の本屋から離れて、私たちは来た道を戻っていた。

人通りも少ないし、とても静かな住宅街。この道に桜はないけど、それでも春は楽しめる。ぽかぽかの日光が降り注いでいて、歩いていて気持ちがいい。今度から散歩も趣味にしようかな。

「お前幸せそうだな。本当、小説馬鹿だよな。陽子って」

健二の声の調子から、私をからかっているのだと理解する。うるさい。意地悪なこと言うな。あんただって、本の虫でしようが。このミステリーオタクめ。

健二を睨んだけど、その視線はぶつかるとはなかった。彼は私の白いトートバッグを見つめている。

「どっかしたの？ 何か変？」

「いや。前から気になってただけど……その熊のピンバッジ、何なの？」

そう言って、健二はバッグに付けられたピンバッジを指さした。トートバッグをデコレーションするのが、今の私の流行りだったりする。

バッグには数十種類のバッジが付いているけど、中でもお気に入りには熊のキャラクターのバッジだ。

「知らないの？ この熊さん、結構人気あるんだよ？」

「へえ」

「可愛くない？」

「えっ？　これが？」

「どの角度から見てもベリーキュート。そう思うでしょ？」

「……ウン。ソウオモウ」

返事はどこか言わされてる感のある、感情のこもっていない声だった。この良さがわからないとは、健二のセンスを疑わずにはいられない。

「はあ、もうバツジの話はいいよ。それより、これからどうする？」

「図書館にでも行こうか。陽子も新刊読みたいだろ？」

おつ、さすが健二。私は買った本を今日中に、しかも時間をたっぷりとつかって読みたい。本好きならわかってくれと信じていた。

大好きな村山優佳先生の、一年ぶりの新刊なんだ。早く読みたい。健二には悪いけど、あなたと一緒にいることを忘れてしまいうくらいには夢中になると思う。

どんな素敵な話が私を待っているのだろう。

そう考えると、自然と足が軽くなる。

「よし、早く図書館行こう！」

私は住宅街を抜ける脇道に入った。

「ちよ、なんで早歩き？　時間はたっぷりあるだろうが……」

健二が私にかけた言葉は「呆れた」と言わんばかりに、ため息混じりの声だった。健二も早

歩きで私の後を追いかける。

今日の私は幸せだ。新刊も読めるし、健二ともこうしておしゃべりしながら散歩している。もしもこれが神様の仕業だったとしたら、その気まぐれに感謝してあげることもやぶさかではない。

住宅街を抜けると、目の前に信号が見える。しかも、赤から青にたった今変わったばかりだ。

どれだけラッキーなんだろう、私は。

ふと後ろを見る。健二とは五メートル以上も離れてしまっていた。

「早くおいでよー。置いてっっちゃうよっ？」

自然と笑みが零れたそのとき。

「陽子！　危ない！！」

——え？

気付いたときには遅かった。

真横から、明らかに制限速度を超えて飛び込んできたのは、巨大な鉄の塊。

私は回避も防御もできず、鉄の塊と激しく衝突した。経験したことのない重たい衝撃が、私の体を、骨を、容赦なく軋ませた。その場にとどまることはできず、私は衝撃がやってきた方

向の反対側に飛ばされた。

続けて刺すような痛みが腕に広がる。私の骨が折れたのだ。

視界が目まぐるしく回転する。焦点は定まらないけど、青色と灰色が交互に入れ替わって私の視界を支配した。

ああ、そうか。

これは空とコンクリート。

私は今、宙を舞っているのだ。

交通事故故に、遭ったのだ。

地面に落下したとき、回る世界は安定した。代わりに頭を鈍器で殴られたかのような激痛が走る。

私の視界が真っ赤に染まる。私の血だ。ぬるつとした血の池の中で、私の体は動かなくなってしまった。体を動かすどころか、呼吸をすることすらままならない。赤黒い血と喉の閉塞感、私に死を思わせるには十分すぎた。

健二？ どこいったの？

早く。追いついてよ。

そうだ、本。本を読まな、くちや……。

……あれ？ どうしてかな。あれほど読みたかった村山先生の新刊なのに、今はもうどうで

もいや。

何だか、体がとても寒い。

私……このまま死んじゃうのかな？

あなたの声が聞きたいよ、健二――

――キミに捧げる物語――



部長の一存でお題が変更されてから三日がたった。

「部長。部誌に載せる原稿を持つてきました」

完成した原稿を手渡そうとすると、イスに座って読書をしていた部長は目を丸くした。

「もってきたのか？ 早いじゃないか。さすがこの神崎王華の愛弟子だ」

そしてにやりと笑い、俺の横っ腹を肘で突いてくる。

「遅いよりかはいいでしょう?」

「もちろんだ。プロットのストックでもあったのかな? 準備がいいね、君は」

まるで俺の行動を把握しているかのような口ぶりでそう言うと、読んでいた文庫本に葉を挟んで机に置いた。

部長は両手で原稿を受け取った。

「ふむ……悲恋、かな?」

部長の表情から笑みが消える。

そして、鞆からレポート用紙を取り出して、カチカチとシャーペンの芯を出した。原稿用紙に視線を走らせて、用意したレポート用紙に何かメモを取り始めた。

小説と向き合うときの部長は、今みたいにいつも真剣な表情を浮かべている。部長の創作に対する情熱が込められたあのまなざしは、何度見ても緊迫感がある。

どのような評価が下されるのだろうか。

期待と不安が去来する複雑な気持ちを抱えつつ、イスに座った。

部長が読み終わるまで、俺は彼女の吸い込まれそうな大きな瞳と、忙しなく動かす右手を交互に見ていた。

原稿を読み終わると同時に、部長は盛大に嘆息した。

「はぁー、全然ダメだね」

部長は原稿を机に無造作に置き、両手を高く上げて大きく背伸びをした。その一連の緩慢な動作は「退屈」の二文字を容易に想像させた。

手放して喜ばれるだなんて思っていない。だけど――

「全然、ダメでしたか?」

あえて「全然」を強調してみた。

「ああ。面白くない。というか、感動できるエッセンスがないよ、この小説には」
中指でトントン、と机を叩く部長。挑発的な言動と態度には、さすがに腹が立った。

「あの、どこがダメか教えてくれませんか?」

「全部」

部長は俺を切り捨てるようにそう言った。

……全部、だって?」

今まで部長に辛口評価を受けたことは少ない。

ただ、小説全部がダメだなんてことはなかった。

「いや、全部というのはいささか不適切な表現かな。そうだね……感動のフィナーレを導くまでの物語の流れが全部ダメ。そう言い直そうか。カタルシスが微塵も得られない。何故だかわ

かるか？」

「わかっていたら、このまま提出しません」

「わかっていたら、だつて？　あまり甘えるんじゃないよ、春人」

眉間に厳しくシワを寄せた部長に、鋭い目つきで睨まれた。俺に何か怨恨でもあるのかと錯覚するほどの目力がある。

「この小説には感情移入ができる下地がないんだよ」

「感情移入、ですか……」

「まず動機。どうして主人公はヒロインのためにここまで苦勞できる？　主人公は父親の暴力に苦しむ女子高生ヒロインを助け出すために、彼女の家に乗り込んでいるな？」

「それは好きな女の子のためだから——」

「そのことが伝わるように書いたのか？　書いてないよ、残念ながら。父親の暴力で苦しむヒロインを助けようとするとき、読者がおもわず主人公を応援したくなるような構成にしないとダメだ。そのためには、主人公がヒロインに夢中だということを丁寧に描かないといけない。主人公とヒロインの関係がわかる——互いに好きになっていく過程をエピソードで見せない」と

部長はそこで一呼吸置き、話を続ける。

「他の切り口からなら、まだまだ主人公の動機を補強できる。だが、春人の考えだと、最低限

今言ったことは書いていないと話にならないよ。これじゃあ主人公はただのお節介野郎さ、悪いけど」

……そうだった。感情移入……これが大事なんだ。

感動するとは、人物の気持ちに深く共感し、心を揺さぶられるということ。

そのためには、作中の人物の気持ちを理解できること、および人物の行動に説得力があることが必要だ。はっきりと人物の動機が伝わり、なおかつ理屈が通っていなければ、人物の行動にたいして読者が疑問を感じてしまうからだ。

たぶん、部長の言っていた「下地」とはそういうことだと思う。これがないと、人物の気持ちに乗っかって感情移入することなんてできやしない。

俺の感動小説は……読者を感動させるスタートラインにすら立てていなかったということか。

「すみません。俺、どうかしました。すぐに修正を——」

「話はまだ終わっていない」

この神崎王華の話を聞け。

低く、冷たい声は、そう言っているようにも聞こえた。

「一番の問題はリアリティの欠如だ。調べていないから正確なことはわからないが、普通はまずこういう状況に陥ったとき、保健所に相談するんじゃないか？　そのあたりの情報が作中に

一切ない。設定が甘すぎるだろう」

部長は「そもそもだよ？」と付け加えた。

「主人公はリスクを考えなかったのか？ 作中では感情に任せて、無策でヒロインの家に乗り込んで父親を説得しているな？ もし説得に失敗したら、父親は娘が暴力の件を人様に言いふらしたことにたいして逆上するかもしれない」

娘に逆上。部長の言うとおりで。どうして気付かなかったのだろう。これじゃあ、ヒロインは――

「そうしたら、娘に対する暴力がエスカレートするかもしれないだぞ？ 父親はより強い暴力で支配しようと思うのだが、春人はどう考える？ そのあたりも書かれていないな」

そうだ……俺も部長が説明した流れが一般的だと思う。

書かれていないどころか、考えが及ばなかった。俺の作品はご都合主義だったってわけか。こんな穴だらけの作品を提出してしまうなんて……俺は何がしたかったんだ。

「家に入り込んで説得するのならば、確実に説得できるだけの材料は用意するのが普通だ。こんな無責任で身勝手な主人公を読者が応援するわけないだろう」

部長の一言一句が俺の胸に突き刺さる。

何も言葉が出てこなかった。部長の言っていることが正論だったから。どうして俺はこんな空っぽの物語を書いてしまったんだろう。そんな虚しいことまで考えてしまう。

「期待していたのだが、ね」

部長はそう言って席を立った。

「部誌に載せられる文字数にも限界がある。今言ったことを全部取り入れることはできない。題材ミスだよ、この作品は。言っている意味、わかるね？」

「はい……一から書き直します」

「正解」

つまらなそうに部長は言った。そして右手をひらひらと振って、部長は無言で席を立った。今日はもう帰るつもりらしい。

出口のドアノブに手をかけようとした部長が動きを止めて振り返った。

「二つだけ、アドバイスしてあげよう。さっき指摘したことを書ける題材を選ぶんだ。君なら見つけられるだろう？ じゃあね」

今度こそ、部長は出ていった。助言を残したときの部長の表情は、とても穏やかだった。

一人取り残された部室。悔しさを抑える必要がなくなった俺は、

「……くそっ！」

気付けば机を力いっぱい殴っていた。刺すような痛みと、強い衝撃が骨に響く。

こんなにも歯がゆいのか……！

小説を酷評されたことが。

少しも認められなかったことが、
自分の想像力のなさが。

どうしようもなく、悔しかった。

このままじゃ感動小説なんて書けやしない。誰もが感動できる小説が存在しないとわかった今、誰かがこの世に産み落とす必要がある。大多数の作家は部長みたいに、そんなものはありえないと最初から決めつけて、誰も書こうとしないだろう。

だから、俺が書かなくちゃ。

どんな読者でもその人の胸を打つ物語。

そういう小説じゃないとダメなんだ。

感情を失った表情を色づけるには……それくらいの質じゃないと、ダメなんだ。

泣きそうな気持ちを必死に堪えていると、不意に窓の外から漏れてくるオレンジ色の光に目を奪われた。

——あいつも今、こうして同じ空を見ているのだろうか……。



意識が覚醒したとき、私は闇の中で一人ぼっちだった。

不思議なことに、体の痛みは消えていた。手足の感覚もある。呼吸が止まりそうな閉塞感も今はもうない。どうして体が回復しているのかわからないけど、どうやら五体満足らしい。

——ここはどこだろう？

辺りは真っ暗で明かりもなかった。右も左もわからないし、見上げたのは空か地面かどうかも判断ができない。

混沌とした闇の中で迷子になってしまった私の心は、おぞましい恐怖で塗り潰された。

誰かいないの？

ここはどこ？

このまま誰にも見つけられずに死んでしまうの？

——そんなの嫌ッ！

助けて健二！

私を一人にしないで！

そのとき、遠くで光が瞬いているのに気付いた。

私は光を求めて走った。あの光に触れれば、健二のもとへ帰ることができる。根拠なんてない。ただ、直感的にそう思った。

私は早く健二に会いたくて、暗闇の中を疾駆する。

光が段々と大きくなる。私と光との距離が近づいているのだ。

光の形が見えてきた。白い輝きを放つ光は扉のように見えるけど、輪郭はぼやけている。同時に二人入っても余裕がありそうな大きさだった。

手を伸ばせば、光の扉に届きそうな距離までやってきた。

しかし、あと一步の距離が縮まらない。一步を踏み出せば、そのぶん光の扉は遠ざかる。

——なんでよ！ あと一步で健二に会えるのに！

一生懸命に走っても。

どれだけ手を伸ばしても。

光の扉に触れることはできない。

こんな状況だというのに、彼の右手を求めたけど、結局その手を握れなかった意気地無し自分を思い出した。

光の扉に変化が生じる。眩しかった輝きが、どんどん失われていく。そればかりか、光全体が闇に浸食されていくかのように曖昧になっていく。

やがて、光の扉は私を嘲笑うかのように消滅した。

そこで私の意識は途切れてしまった。

——キミに捧げる物語——



今日は部活を休んだ。

俺は週一日だけ部活を休むことを部長に認めてもらっている。こうして放課後に街を歩いているが、断じてサボりなどではない。

学校の帰り道。駅前の商店街を抜けて、目的地へと続く桜並木道をのっそりと歩く。無数の桜の花びらは今日もはらりと空を舞っている。

桜の雨を見るたびに、あいつと一緒に見たあの空を思い出させる。

青い絵の具を水で溶かしたような色が、どこまでも遠くへ広がっている空。細長い雲がゆっくりと抜けていく。見上げれば、白と青で構成された空のキャンバスに、桜の花びらが薄桃色の水玉模様を作っている。

——こんなにキレイな空、見たことないよ！

鈴の音を思わせる凜としたあいつの声は、風の運ぶ花びらとともに空に吸い込まれていった。

あの頃……俺たちは他愛のない日常の中にいた。

お互いの好きな本の話で、どれほど盛り上がっただろう。あいつは特に恋愛小説が好きだったけど、どんな小説でも面白い、楽しいって読んでいた。本当に小説を愛してるんだなって今でも思う。そういえば、俺は子どもの頃から推理小説にハマっていたっけ。

二人で過ごした遠いあの日々に、特別なイベントなんてものはない。

それでも俺にとつて、かけがえない時間だったのはたしかだ。

あいつのはしゃいだ横顔が目につかんだ頃には、図書館の近くにある目的地にたどり着いていた。

近辺では有名な大学病院。八階建ての真っ白な病院で、高さだけでなく、横の長さとも奥行きのある広さもある。

立派なのは見た目だけではない。各診療科に少なくとも一人は名医がいるのだとか。そのせいか、県外からこの病院で診察を受ける人も少なくない。まあ、俺にはあまり関係のない話だけど。

入口の自動ドアを抜けると、奥に総合受付と会計が見える。前にはたくさんのイスが並んで、診察や会計を待つ患者が大勢座っている。数えていないから厳密な数はわからないが、軽く二〇〇席は超えている。

俺は面会の受付を手早く済まして、入院病棟に続く廊下を歩いた。下ろしたてのローファーでコツコツと乾いた音を鳴らしながら。病院特有のリノリウムの床は、学校指定のローファーとの相性が抜群だった。

入院病棟に来た俺は、そのまま五階を目指して階段を上った。

面会相手が入院している病室にまでやってきた。ドアの横にはプレートがあり、そこには五〇二号室と書かれている。さらにその下に、名前入りのプレートが設置されていた。

かなもりみさき
金森美咲。

面会相手であり——俺が恋した幼なじみ。

ドアノブに伸ばした臆病な手が、扉を開くことをためらった。

……会うのが、少しだけ怖い。

会いたいって気持ち強いけど、面会した帰り道は心が苦しいのだ。会うたびに、現実を突きつけられているような気がするから。

それでも……やっぱり会いたいって気持ちが勝つ。

だから俺はここにいる。

少しだけ勇気を右手に込めて、病室のドアを開けた。

美咲の病室は一人部屋だ。彼女の身の回りには何も無い。あるのは点滴とパイプ椅子だけ。なんとも殺風景だ。ロッカーに着替えなどの荷物が入っていて、必要最低限の荷物しかこの場にはない。

「よう、美咲。元気か？」

そう言いながら、彼女のベッドに近づいて、隣に置かれたパイプ椅子に腰を下ろした。

——元気なわけがない。

知っているけど、俺は明るく見えるように努めて話を続けた。

「ほい、見舞いの品。これな」

俺は鞆から熊のキャラクターのぬいぐるみを取り出した。バレーボールくらいの大きさのぬいぐるみで、赤い首輪が付けられている。頭には緑色のリボンがアクセントとして巻かれている。

美咲はこのキャラクターが好きだ。野生を忘れた、垂れ下ったやる気のない目。半円型の小さな耳。デフォルメされた愛らしい手足。美咲いわく、どの角度から見てもかわいいのだとか。俺には女子のセンスがわからなかった。

ぬいぐるみを美咲の枕元にそっと置いた。案の定、当の美咲は何も語ってはくれない。

わかってている。美咲はプレゼントが気に入らないから怒っていると、そういうわけじゃな

いんだ。美咲がそんなことを思うわけがない。そもそも、彼女が本気で怒っているところを俺は見ることがない。

事故に遭ったあの日だって、俺が突然押しかけたにも関わらず、喜んでいたのを知っている。必死に気持ちを隠そうとして、怒ったようなフリをしていたことも。幼いころから一緒だったんだ。お前のことなら何でも知っているさ。

「なあ、もう四月だぜ？ 今年も美咲の誕生日、祝ってやるよ」

話題を変えてみても、まるで反応はない。

「覚えてるか？ 小学生の頃、お前の誕生日に本をプレゼントしたら、すごく喜んでたよな。まるで子どもだったな、あれは。あのときから変わってないよ、美咲は」

なあ。今、意地悪なこと言ったんだぞ？ 怒ってくれよ。

「でもさ……今年のプレゼント、すごく悩んでるんだ」

優柔不断だろ？ 呆れたんだったら、ため息一つくらいなら吐いてもいいんだぞ？

「いつそのこと、あげないってのはどう？ ある意味サプライズだろ？ ……あ、それ去年試したっけ」

毎年誕生日プレゼントは渡しているけど、一度だけあげなかった年がある。美咲が笑わないのなら、怒った顔でもいいから見たいと思った。

俺は……とにかく、その静かな表情を変えたかった。

プレゼントを用意しなかった年の美咲の誕生日。俺は「ああ。今日お前の誕生日だっけ？忘れてたわ」って冷たく突き放した。

それでも美咲は空っぽの表情のまま、虚ろな眼球をきよきよと動かして、ただ俺と天井を交互に見つめるだけだった。

「なあ……美咲」

気付けば視界は滲んでいた。

「笑ってくれよ……次に見舞いに来るときは、誕生日プレゼント用意してくるからさあ。どうして俺だけ泣いてるんだよ……たしかに、昔からお前は泣かないヤツだったけどよ。頼む……別に怒ってくれてもいい。前みたいにプレゼント忘れて来るから、起き上がって俺に殴りかかって来いよ。特別に殴らせてやるから。なんでもいい。なんでもいいから、頼むよ……俺の言葉に少しでも反応してくれよ……」

自分でもわかるくらいに声が震えていた。目頭が熱い。制服のズボンには零れ落ちた涙が小さな染みを作っている。

交通事故って……なんだよ。

どうしてだ。

何で美咲なんだ。

美咲は——どうして言葉も表情も失わなければならなかったんだ。

涙が枯れるまで、俺はそこから一步も動けなかった。



——眩しい。

私は闇の中で迷子になっていたはず。光の眩しさを感じたということは、暗闇から脱出できたのだろう。朦朧とした意識の中、私はそんなことを考えていた。

徐々に意識もはつきりしてきた頃、ゆっくりと瞼を開いた。

すぐに目に入ったのは、シミ一つない真っ白な天井と、規則正しく並ぶ蛍光灯。ここは室内みたいだ。背中感覚はないけど、どうやら私は横になっているらしい。

続いて視線を左に移す。窓の外には青空が広がっていて、ゆっくりと雲が抜けていく。空の下には、いくつもの高層ビルやマンションが並んでいる。

情報を整理すると……ここは建物の中。しかも高い視点で景色を見られることから、上層階の一室といったところだろう。

右に視線を向ける。

そのこの立っていたのは健二だった。

「陽子……目を覚ましたのか!」

この声……ああ、懐かしい。

私は健二のもとへ帰ることができたのだ。

今すぐ健二の腕の中に飛び込みたい。

生きているって、実感したい。

そう思った私は、上体を起こそうとした。

——あれ？

体が動かない。そもそも眼球を動かすことはできても、首を曲げることができない。

何これ……絶対おかしい。

体の自由がきかないだけじゃない。自分の体のはずなのに、何故か四肢が切り離されているような感じがする。腕に力を込めようとしても、足を動かそうとしても、私の命令に従ってはくれない。

全身の感覚が、まるでない。

強烈な違和感を覚えた私は、健二に助けを求めようと声を出そうとした。

——そんな……嘘でしょ。

声が、出なかった。

喉を震わせようとしても、全然力が入らない。

えっ……どうだったっけ？ わかんなくなっちゃった。

——私、今までどうやって声を出していたんだっけ？

「良かった……もう、ずっと眠ったままだと思っていたから……」

涙を流して、健二は私の手を握った。辛うじて眼球だけは動くので、健二の行動はわかる。ただし、触られた感触はない。あれほど焦がれた彼の手の温もりなのに、今の私にはそれを感じることはできなかった。

——そういえば、私は交通事故に遭ったんだっけ……。

思い出したそのとき、私の脳裏に悪魔の脚本が出来上がる。

私は健二と休日に新刊を買いに本屋に出かけた。その後、図書館に向かうことになる。道中で私は交通事故に遭った。目が覚めたら病院で、体が動かないのは事故の影響。かろうじて意識だけはある。

——詳しいことなんてわからないけど……事故で脳に深刻なダメージを負ったのかもしれない。

——嫌だ。

そんな現実、受け入れたくない。

こんなのって、あんまりだ。
ねえ健二。
もつと手を強く握って。
生きてるってこと、実感させて。
泣いてばかりいないで何とか言っ
嘘でもいいから、この現実を否定して。

話し方を忘れた私は、誰の耳にも届かない言葉を必死に叫び続けた。

——キミに捧げる物語——



あれから二回書き直して、部長に読んでもらった。だけど、決まって部長は「これじゃあダ

メだ」と言う。

リアリティがない。主人公の動機が弱い。キャラクターの心理がしつかりと描写できていない。展開が速い。尺に対して物語が膨らみ過ぎて消化不良を起こしている——などなど。ここまで親身になってアドバイスをしてくれるのはありがたいことではあるが、そろそろ俺も焦ってきた。部誌発行まで、あと二週間を切ったからだ。

今も例によって部長に原稿を読んでもらっている真つ最中。今回もまた酷評されるのだろうか。今までこれほどダメ出しされることはなかったのに。

今回書いた小説は、溺愛していた長女の死を受け入れられない母の物語。母は嫌っていた次女を長女だと思い込むことによって、長女の死という辛い現実から目を背けた。

母は次女のことを長女の名前で呼び始めた。

それをきっかけに、母はどんどん狂っていく。母にとって、次女は長女であって、次女など最初から存在しないかのように振舞うようになった。

そして母の愛を欲していた次女は、長女の代わりという歪んだ形で母から寵愛される。そんな複雑な家庭の話だ。

静かな部屋に響くのは、時計の針が動く音。やけに耳にまとわりつく。嫌な気分だ。秒針が刻む一定のリズムは、俺の緊張を一秒ごとに加速させている。

「ふう……」

静寂を破ったのは部長のため息。眉をしかめて難しい顔をした部長は、机の上に俺の原稿を置いた。

「……どうでしたっ？」

いつものように、おそるおそる尋ねる。

「うーん……やっぱりダメだ」

その言葉を聞くのも四回目だ。

ダメ。

そのたった二文字に込められた破壊力をこの短期間で嫌というほど思い知った。

「あの、今度はどこがダメでしたか？」

「以前よりも話の筋は通っている。よく修正できているよ。でもね、何て言うのかな。『感動できる小説ってこういうものでしょ？』という春人の明け透けな態度が物語から感じ取れるんだよね」

読者をナメている。そう言われた気がした。自分の小説にそんな評価が下されたのは初めてだった。

さすがの俺もふつと怒りの感情が込み上げてきた。

どうしてダメなんだ？ 部長のアドバイスどおりに書いているはずだ。俺の実力不足のせいで、部長の求めているレベルに達していないというもあるだろう。だけど、ここまで執拗に

切り捨てなくてもいいじゃないか。

「それは……俺が手抜きしたってことですか？」

普段よりも語気が強くなっていたかもしれない。

「そうじゃない。なんとというかカクレイに小さくまとめすぎている、という感じかな。つまり誰でも書けるんだよ、この小説は」

部長の投げた鋭利な言葉が、俺の怒りを貫いて胸を抉った。

誰でも書ける、か。

こんなの書いているようじゃ、美咲を感動させるような小説なんて生み出せない。

どんな見舞いの品を送っても無駄だった。

プレゼントを忘れて、美咲を突き放すようなことを言っても無駄だった。

嬉しそうに笑う顔も。

可愛らしく怒った顔も。

美咲はもう見せてくれない。

それなら——涙に暮れる顔はどうだろうか？ 使う顔の筋肉だって、怒ったり笑ったりするよりも少ないはずだ。

それに小説で泣かそうとしている理由だってある。俺たちは読書感想交換ノートをつけていた。ノートを見直せば、美咲の好きなジャンルもわかる。

いや、もうわかってる。

恋愛小説……このジャンルで感動小説を書ききれば、絶対に胸に届くはずだ。

美咲が泣いてくれる根拠としては弱いかもしれないけど……わずかな希望にでもすがって生きなければ、俺の脆い心は現実には押し潰されてしまいそうになる。

誰もが感動する小説を美咲に読ませるんだ。

もしそれが存在しないのなら——俺が書く。そう思っていたからこそ、感動できる類の小説のプロットはたくさんあった。だから部誌のお題だって速攻で書き終わる。

そう思っていたのに……このザマか。

「おい、聞いているのか春人！」

部長の声で我に返る。

「す、すみません……聞いていませんでした」

「何だつて？ まったく君というヤツは」

部長は責めるような口調でそう言うと、静かに席を立った。

そして窓際に向かい、桜の木を見ながら核心を突く言葉を放つ。

「金森美咲のために感動小説を届けたい。そう思っているんじゃないのか？」

部長は窓を開けて、くるつと振り返る。風に運ばれた桜の花びらが部室に舞い込んできた。花びらにつられるように、部長の黒髪もふわりとなびく。

「隠し事をするなんて水臭いじゃないか」

穏やかに微笑む部長。やつぱり気付いていたのか。誰もが感動する小説の話をしたときに心配してくれたときから、薄々はわかっていた。

部誌のお題を急に『感動小説』に変えたのも、俺に厳しく指導するのも、全部俺のためだった。

「……やつぱり気付いていたんですね」

「ああ。ミステリー好きな君が感動小説の話をするものだから、不思議に思っていたんだ。『死なない教師の殺人事件と、その謎を解き明かすミステリー研究会女子四人組の話とか面白くないですか？』とか言うほうが、よっぽど君らしい」

部長はご自慢の長い黒髪をそつと撫でた。「それにね」と話を続ける。

「感動小説というお題に変更してから、すぐに原稿を持つてくるあたり、こういう類の話のプロットを溜めこんでいるんだなと確信した。じゃあ、何故感動小説を書きたがっているのか。そこから導かれる答えは簡単だ。君が感動できる恋愛小説を書く理由なんて、一つしか思いつかない」

部長は右手の指を折り曲げて作ったピストルで俺を撃つ仕草をした。

これで証明終了。そう言っているのだろう。

「……よく美咲のことを覚えていましたね」
 「先輩の悩みごとは、この神崎王華の悩みごとでもある。覚えておくといい」
 部長の指先から、再び空気の弾丸が撃たれた。二発目の弾丸は俺の眉間のあたりを貫いた。

一度だけ、部長に美咲のことを相談したことがある。

美咲は重度の麻痺状態だった。

医者が言うには、美咲の麻痺は事故後に数分間心臓が停止して、脳への酸素の供給が絶たれた結果らしい。麻痺はその後遺症みたいなものだ。

通常、植物状態というのは広い範囲で脳が損傷しているけど、生命維持に辛うじて必要な脳幹が無事な状態のことを指す。

美咲の症状が植物状態と決定的に違うのは、本人に意識があること。

植物状態の場合、前頭葉など、人の意識に関連性のある部位が損傷してしまい、意識がないのだとか。美咲の麻痺状態の原因が医者の言っていたとおりだとすると、美咲の脳に激しい損傷があるわけではない。

美咲の脳は傷ついていない。

つまり——回復の見込みはゼロではないということ。

俺にとつて、このことは希望だった。意識があるってことは反応ができないだけで、俺の言

葉も届いているし、ちゃんと見えているんだ。

俺の行動に対して反応してほしい。

そこで美咲のことを部長に相談したんだ。小説で彼女に表情を与えてあげることではできないのかって。

当時、部長は「難しいかもしれない……」と頼りなく呟き、困ったように視線をそらすだけだった。あの『神崎王華』に断言できないこともあるのだと思い知った。

「俺は……やっぱり美咲を救えないのでしょうか？」

我ながら、情けない言葉だと思った。美咲に聞かれたら、きつと「かつこ悪いぞ、男の子」ってからかわれてしまうかもしれない。

「救えるかどうかはわからない。それに前にも断言したが、誰もが感動する小説はありえないよ」

部長が悲しい声で事実を告げる。

俺だって、知っているさ。

アマチュアの俺の書いた小説ごときで、誰かを感動させることなんて——

「でもね」

そう言つて、部長は踏みつけるようにしてイスの上に足を乗せる。ダンツという小気味いい音は二人きりの室内によく響いた。日光に濡れてぎらついた黒いニーソックスに自然と視線を

奪われる。

俺はこのポーズを知っている。

部長は得意な顔で断言した。

「金森美咲を感動させる小説は春人！ 君なら書ける！ この神崎王華が断言しよう！」
部室に『神崎王華』の熱を帯びた声が響き渡った。



どうやら、私は重度の麻痺障害になってしまったらしい。

お医者さんは植物状態と麻痺の違いを詳しく説明していた。だけど、その説明を理解できるほど、私は冷静ではなかった。現実を理解することよりも、現実には押し潰されないように気を保つことで精いっぱいだから。

何日たっても、回復の兆しはない。

相変わらず体の感覚はないし、動かすこともできない。奇跡的に声だけは出る——なんてこ

とも、もちろんなかった。

何もできない日々は、いつまでも続いていく。

ただ季節だけが私を置き去りにして、残酷に移りゆく。

時間は明確な悪意を持ち、私の上をゆっくりと通り過ぎていくのだった。

生きている気がしない。

周りの世話はみんな看護師さんにやってもらっている。熱いタオルで体を拭いてもらったり、衣類やオムツを換えてくれる。

情けない。

自分一人では、身の回りのことなんて何一つできない。それどころか、感情すら表に出せないのだ。笑ったり、怒ったりすることさえも。

もちろん、涙だって出ない。

胸が張り裂けそうなほど悲しいのに、泣く権利さえも奪われてしまった。

唯一の救いは、健二がお見舞いに来てくれることだけだった。健二は週に二回、お見舞いの品と土産話を持って、あの無邪気な笑顔で病室に入ってくる。

健二は高校で部活に入ったらしい。文芸部だって。小説とか書けるのかな。ミステリー研究会とかのほう似合ってるのに。

でも、健二の書いた小説かぁ。ちよつと読んでみたいかも。

コロコロと表情を変えて、健二は学校での出来事を大げさに話す。そんなに嬉しそうに話すほどのことでもないでしょつて、私はいつも心の中で笑っていた。

健二と会える。

それが、それだけが、幸せな時間だった。

しかし、私のささやかな幸せも次第に苦しみに変わった。

健二が私のためにお見舞いに来てくれるのはありがたい。

でも、彼のその行為がとても重たく感じられた。

私は寝たきりで、もう死んだようなものだ。生者の自由を縛る資格なんてない。

それなのに、私は健二に見舞いに来させて、自由を奪ってしまっている。それがとても苦痛だった。

健二のことは今でも好きだ。

だけど、今の私では健二のことを幸せにするどころか、不幸にすることしかできない。

今日、私の前で健二は泣いた。私が麻痺状態になってからは、ずっと笑顔を絶やさなかったのに。

健二の泣き顔から逃げるように天井を見る。だけど、やつぱり気になって健二を見てしまつた。

——どうして泣いているの？

疑問に思ったとき、私の問いに答えるように健二は涙声で言った。

「笑つてくれよ……次に見舞いに来るときは、誕生日プレゼント用意してくるからさあ。どうして俺だけ泣いてるんだよ……たしかに、昔からお前は泣かないヤツだったけどよ。頼む……別に怒ってくれてもいい。前みたいにプレゼント忘れて来るから、起き上がって俺に殴りかかって来いよ。特別に殴らせてやるから。なんでもいい。なんでもいいから、頼むよ……俺の言葉に少しでも反応してくれよ……」

健二のすすり泣く声が、私の胸を締めつける。

そつか。

私が健二のためにできることは、感情を表に出すことなんだ。

私はちゃんと生きてるよつて、教えてあげることなんだ。

でも、どうやつて？

……わからない。

悔しい……悔しいよ。

何もできないことがこんなにも歯がゆいだなんて、私は知らなかった。



「俺に……感動小説が書ける？」

俺の疑問に対して、部長は頷くことで肯定した。

「言ってること、矛盾してないですか？ この世に誰もが感動する小説なんてないって、部長自ら言ってたじゃないですか」

「おいおい、早とちりをしないでくれ。いいか。君なら金森美咲を感動させる小説が書ける……そう言ったんだ。誰もが感動する小説のことについては言及していないよ」

部長は「このうっかり者め」と付け加えて苦笑する。

俺には人を感動して泣かせるほどの筆力はない。それは部長に酷評されたから自覚している。構成を見直せとも言われた。単純に力不足なんだ。

でも部長は、俺には美咲を感動させることができると言っ。

部長が俺に伝えたかったこと——正確にはわからないけど。

少なくとも、俺しか書けない「何か」があるってことなんだと思う。

「俺はまだまだ実力不足ですけど……美咲を感動させるネタだけは持っている。そういうことですか？」

「ようやく気付いたか。君なら自力で気付くと思って見守っていたが……時間がかかったね。やはり君はデキが悪い」

「……師匠の教え方が悪いせいじゃないですか？」

俺が毒づくくと、部長は楽しそうに笑った。

「ふふふ、言うようになったな。でも——デキの悪い弟子が成長していくその姿を、直に見ることが出来る。とても気持ちがいいね。師匠の特権というヤツだな」

部長は意地の悪い笑みを浮かべて、俺の頭を撫でた。

「子ども扱いしないでくださいよ……で、そのネタって何です？」

「ん？ さあ」

俺の頭から手を離れた部長は、少しだけ首を傾げる。

「えっ？ わ、わからないんですか？」

「そんなこと、この神崎王華が知るわけないだろう」

え——知らないだつて？

おいおい……冗談だろ。

自分でもよくわかってないのに「金森美咲を感動させる小説は春人！ 君なら書ける！」って堂々と断言したのか？

夢見させるようなこと、言うなよ。

普段なら笑って見過ごす冗談だけど、今回は無理だ。こっちは真面目に相談しているのに……部長は俺の心を踏みにじったんだ。

「ふざけないでください、部長！ 俺は真剣に——」

「ふざけてなどいないよ？」

こんつ、という音とともに、胸に軽い衝撃が走る。

部長の拳が俺の胸をそっと叩いたのだ。

「春人と金森美咲の人生を小説にすればいい。君たちの歩んできた人生なんて、この神崎王華にはわからない。知るわけないと言っただけはそういう意味さ。

いいかい、春人。互いの心を正確に、繊細に、それでいてダイナミックに書き出すんだ。二人の人生を書ける作家は、この世で君しかない。そうだろう？」

部長はそう言っただけで頬を緩めた。

そうか……そうだったんだ。

主人公の動機も、リアリティも、キャラクターの心理描写も。

俺たち二人の軌跡を追うのであれば、正確に、そして色濃く書ける。だって、現実で起きたことなんだから。このテーマを選ばせるために、部長は題材ミスだと言っていたんだ。

書けるか不安だし、書いても美咲が泣いてくれるかわからない。

だから俺はもう一度勇気をもらいたくて、わざと弱音を吐いた。

「……俺でも書けます、よね？ 俺たちの想いを綴った感動小説を」

「君が迷わないように、何度でも言っただけよ」

いつものように部長は胸を張った。他人のことだというのに、その表情はやけに自信に満ちている。部長が俺を信頼してくれているんだと思うと、不思議と不安が和らいでいく。

「——金森美咲を感動させる小説は春人なら書ける。この神崎王華が断言しよう」

あの『神崎王華』にそう言われたら、不思議と書ける気がする。勇気を貰えた気がした。

「部長、ありがとうございます」

「礼などいい。部誌のことはいいから、春人は全力で感動小説に挑むがいい」

「え？ で、でも部誌は二人でやらないと——」

言いかけて言葉を飲み込んだ。

唐突に、部長が机から取り出した紙の束。おそらく部誌の原稿だ。

しかし、一人分の部誌にしてはやけにボリュームがある。少なくとも、明らかに部誌の規定枚数を超えている。

「脱稿直後の作品だが、昨日までに四作書いた。このうち二つを推敲して載せれば問題ないだろう?」

部長はしたり顔で俺を見つめてきた。

まったく、この人は……どこまで後輩想いなんだ。

「……甘えていいんですね?」

俺の言葉には答えず、部長は右手を上げてひらひらと振った。部誌はこの『神崎王華』に任せて早く行け。そして君たちの物語を紡げ。

……優雅に揺れる部長の右手には、そんなメッセージが込められているような気がした。

「失礼します!」

俺は自分の鞆をひったくり、部室を後にした。

帰宅して着替えもせず、机に向かう。ノートとペンを取り出し、俺と美咲の関係について、時系列を追って書きだしてみた。

幼なじみで、小さい頃からずっと一緒だったこと。読書感想交換ノートをつけたこと。二人でよく図書館に行き、本を読んだこと。桜並木道を歩いたこと。事故当日のこと。

ペンを握った俺の手は、ノートの上を軽快に滑っていく。真っ白だったノートは次々と黒く汚れていく。

——知っていたさ。

美咲が俺に恋愛感情を抱いていたことくらい。小さい頃からいつでも一緒だったから、俺はあいつのことを何でも知っている。

だけど、俺は臆病だった。

もし付き合えたとしても、幼なじみと恋人では全然違う。付き合うようになって見えてくる相手の嫌な部分もあるだろう。

そうなったら、美咲は俺を好きなまままでいてくれるのだろうか。

……美咲に嫌われるのが怖かった。

別れるようなことがあれば、俺たちはもう以前のように仲のいい幼なじみには戻れないかもしれない。幼なじみであると同時に、すべてをさらけ出し合った元恋人という関係になるのだから。

あのさ、美咲。

俺、お前に謝らなくちゃ。

気兼ねなく接することができる幼なじみって関係が壊れるのが怖くて、美咲の気持ちに気付かないふりをしていたんだ。

本当にごめん。

今さら遅いかもしれないけど……俺はお前のことが好きだ。

俺が美咲を想う気持ちも。

美咲が俺を想う気持ちも。

それらすべてをノートに書き殴った。二人の気持ちは複雑に絡み合い、化学反応を起こして物語は広がっていく。

物語の骨格がある程度できたので、パソコンを立ち上げて執筆を開始した。静かな自室に、キーボードを叩く無機質な音だけが響く。

——なんだろう……頭の中がぐちゃぐちゃだ。

二人の想いを込めてキーボードを叩いているうちに、この不思議な感覚に溺れていた。

俺たちの恋愛小説を書いて、美咲に俺の気持ちを伝える。

それが泣いて喜ばせることに繋がるんじゃないだろうか。

そんなシンプルな気持ちだが、俺の全細胞を躍動させる。

自然とキーボードを叩く速度が上がっていく。想いを爆発させて、俺と美咲の物語を高速で紡いでいった。

「美咲……楽しみに待つてるよ……」

脳内で生まれた物語を圧縮させて、ディスプレイに反映させる。

美咲の誕生日まで、その作業をひたすら続けた。



体は動かないけど、眼球を動かせることは不幸中の幸いだった。もし眼球の自由さえ奪われてしまったら、一日中、天井とにらめっこをしなければならぬからだ。

今日もまた、窓の外を見て過ごした。

たくさんの空を見た。晴れ、曇り、雨、朝、昼、夕方、夜——窓から見える空は、今まで私に気付かなかった表情をいろいろ教えてくれた。

それでも景色は空の表情が変わるだけで、基本的に景色は変わらなかった。

ここからだ四季を楽しむことができない。

もう二度と、あの桜並木道を歩くことができないのかもしれない……気付いたら、そんなネガティブな考えが脳にこびりついていた。

本当に……変わらない、日常。

一生変わらなかつたら、どうしよう。

「おっす、美咲！」

病室のドアが開く音と同時に、愛しい声が聞こえてきた。その声を聞いただけで、心を包む黒い霧が晴れていく。

声の方向に視線を移すと、そこには優しく微笑む健二がいた。
今日も来てくれたんだ。

彼が病室にやって来るときばかりは、変わらない日常もいいかも、なんてことを考えてしま
う。

本当は、健二の自由を奪うべきではないのに。

それでも健二がお見舞いに来てくれると、私の心は弾むのだった。

今日も健二はお見舞いに来てくれた。

いつも来てくれてありがとう、健二。

健二が病室で泣いた日からずっと考えていた。

どうしてお見舞いに来てくれるんだろうって。

何でこんなに私のことを想ってくれているんだろうって。

私ね……健二も私のことが好きなんじゃないかなって思ったんだ。それって私に会いに来てくれる理由としては十分だと思う。

あの日の涙は、愛する人を想うが故の涙だった……そう考えたら、なんだかロマンチックでしょ？ そんなふうに考えちゃうのは、恋愛小説の見過ぎなのかな。

私の考えは間違っているのかもしれない。

だけど、もし健二が私のことが好きだしたら、すごく嬉しい。自分のことを何一つする
とができない私にとつて、それは大きな希望だった。

ついこの間まで、健二の自由を奪ってしまうことが苦痛……そんなふうに考えていたのに。
今では好きって言ってほしいな、なんて思ってしまった。

わがままだって言われてもかまわない。

健二の「好き」が欲しい！

そう願った。

その願いが叶うチャンスはすぐに訪れた。

私の誕生日前日、健二は意外なことを口にした。

「なあ陽子——明日の誕生日にさ、俺の書いた恋愛小説を読んでくれないか？」



美咲の誕生日当日。

俺は今、美咲の病室の前に立っている。

緊張しているわけじゃないけど……この小説を読んでもらって、それでも美咲が感動してくれなかったらと思うと、ちよつとだけ怖い。

——金森美咲を感動させる小説は春人なら書ける。この神崎王華が断言しよう。部長の言葉を思い出す。それだけで恐怖心が和らぐのだから不思議なものだ。

ゆつくりと病室のドアを開ける。

「よう、美咲！」

まだ少し残る不安を振り払うように、俺はいつもより明るく努める。

室内は相変わらず殺風景だった。点滴とパイプ椅子しかない、白い部屋。

ベッドに近づき、面会者用のパイプ椅子に腰を下ろした。

「美咲、誕生日おめでとー！俺は早生まれだから、少しの間だけお前のほうがお姉さんだな」

美咲の雪のように白い手を握る。美咲の手は相変わらず細くて頼りなかったが、この前よりも温かいような気がした。

「あのさ……誕生日プレゼントなんだけど……俺、恋愛小説書いてきたんだ」

美咲の頭を撫でながら、俺は言った。

もし美咲が麻痺状態じゃなかったら、笑いながら「健二が恋愛小説？」と俺を小馬鹿にして

——そして、嬉しそうな表情をするんだろうな。

俺は鞆から原稿を取り出した。

俺たちの物語は、きつと美咲の心に届くはず。

今はそう信じて、この物語を読み聞かせよう。

そう——水沢健二という名の『斉木春人』と、日野陽子という名の『金森美咲』の、二人だけの恋物語を。

「タイトルは『キミに捧げる物語』だ。笑うなよな……読むぞ。『小さい頃から、私と水沢健二は一緒だった——』」

読み始めた瞬間、幼い日の俺たちがフラッシュバックした。おなじみの満開の桜並木道が背景として蘇る。

桜の花びらが散るたびに、好きと言えばよかったって後悔した。

もう二度と、後悔しないように。

美咲に響け。
散ることのない、俺の思い——



驚いた。健二が恋愛小説を書くなんて。もし話すことができたのなら、絶対からかってやるのに。

「小さい頃から、私と水沢健二は一緒だった——」

物語が始まった。

——一言一句、聞き逃したくない。

そう思った私は、健二の照れ交じりの声に耳を傾けた。

その物語は健二と私の物語だった。私の視点で物語は紡がれていく。

なんというか、とても恥ずかしい。というのも、私が健二に恋していく様子がきっちり描かれているのだ。

一番恥ずかしかったのは、事故に遭ったあの日、私が健二に誘われて喜んでいたこと。私の

心は健二に見透かされていたらしい。もし体が動くのならば、真っ先に耳をふさぐ場面だと思
う。

でも、健二が私の気持ちに気付いていた。それは意外だった。ニブチンなのは私の方だった
のか。

物語が進むにつれて、健二は様々な表情を見せた。

ちよっぴり困ったようにはにかんだり、頬を膨らませて怒ってみたり、目に涙を浮かべたり
……私の大好きな人懐っこい笑顔を見せてくれたり。その表情をすべて記憶に焼きつけたくて、
私はずっと目が離せなかった。

劇中の時間はゆっくりと過ぎていく。事故に遭い、苦しむ私。何度も見舞いに来るけど、何
の力にもなれないことに絶望する健二。

小説中の『私』は私と同じように、感情を表に出せないことを歯がゆく思っていた。

何度もお見舞いに来てくれる健二に申し訳なくて。

彼のためにできることが何一つないという事実が、私の心を絞めつけた。

この物語は——まるで私が書いたかのように、私の気持ちが余すことなくリアルに書き綴ら
れている。

——どうして、健二は私の気持ちがわかったの？

驚くと同時に、嬉しさが込み上げてくる。足元から崩れ落ちそうな絶望的な世界に、光が咲

いたかのように希望が溢れてくる。

私たちは小さい頃から一緒だった。無意識に呼吸をするのと同じように、当たり前前にそばにいた。

会話なんてできなくなつたって。

表情を作ることができなくなつたって。

同じ時間を過ごしてきた私たちは、心の奥で繋がっていたんだ。

健二の作った物語は、そんな当たり前前を教えてくれた。

『聞いてくれ』

健二の声が上擦った。

視界に入る彼は瞳を潤ませて、頬を上気させていた。

なんで泣くのよ。やだ、私まで——

『君のことが好きだ。君を救いたい。君の表情が見たい。そのためにできること——小説を書くことくらいしか思いつかなかった。二人の物語を書き綴り、俺の気持ちを伝えれば、何かしら陽子を感じ取ってくれる。それが表情に現われてくれる。そう思つたんだ』

健二は一度深呼吸をした。

そして、ゆっくりと口を開く。

『俺の気持ちは、ちゃんと君に届いているのだろうか。鈍感な俺には、よくわからない。だっ

て、君は何も語らないのだから』

物語は終わりを迎えようとしている。

私は愛する人の想いに必死に耳を傾けた。

『だから、君を感動させたかった。君の表情に色をつけたかった。笑わなくていい。怒らなくていい。ちよつと涙を流してくれるだけでいいんだ。』

なあ陽子。

俺は君のことを愛しています。

俺の気持ちが伝わったのならば。

君が俺のことを愛しているのならば。

嬉しいって感じてくれたのならば。

せめて、泣いてはくれませんか？』

健二が読み終わると、病室は静寂に包まれた。

彼は原稿から目を離して、私の様子を伺おうとした。

やだ——泣いてるのがばれちゃつた。

「よ、陽子……」

静寂を破つたのは、嗚咽交じりの健二の声。

私を見つめる健二の瞳から涙が溢れていた。愛を語つたその表情は、どんな飾つた言葉を語

るときよりも美しく見えた。

健二は席を立ち、私の頬を伝う涙を指で拭う。この涙は両想いだったことに対する嬉し涙。健二、ちゃんと気付いてる？

言葉はもういらなかった。

健二は私の両手を握る。健二の手に包まれた私の手は、随分と小さくて頼りない手になってしまっていた。

健二のそばにずっといたい、

私と健二の距離がゼロになる。

唇で互いの温もりを交換した。

初めてのキスは、涙で味がわからなかった。

——キミに捧げる物語 了——



夕方になり、いつの間にか雨は上がっていた。大きさは様々だが、水たまりがいくつかできていた。地表を叩く雨音はもう聞こえないけれど、濡れた道路を自動車が滑る音は耳に心地よい。

ひとひらの桜の花びらが水たまりに着水する。水面に映る雲は静かに波打ち、揺らめく空はやがて安定した。

思い出の図書館から出てきた俺は、桜並木道を歩いている。

美咲が涙を流してから約一年がたった。

少しだけ、美咲は前に進んだ。口もとをわずかに動かせるようになった。顔の筋肉の麻痺状態が良好に向かっているらしい。

以前のような生活を期待するのは相変わらず難しいらしい。だけど、こうして少しずつコミニケーションが取れるようになっていけば、日常会話ができるレベルには回復する見込みくらいはあるかもしれない。そんなふうに期待してしまう。

また、あの『神崎王華』は実家の近くの大学に通いつつ、本格的に作家を目指らしい。本人いわく「圧倒的文圧で、この神崎王華が小説の常識をぶっ壊す！」のだとか。なんだかロツクだ。発言の意味はこれっぽっちもわからないけど、パワフルな言葉つかいがなんとも部長ら

しかった。

そして俺——斉木春人は三年生になった。

俺は部長みたいに作家になりたいと思っっているわけじゃない。

だけど、小説は誰かの胸に必ず届く——単純だけど、そんな嬉しいことを知ってしまった。今はただ、筆を取ろう。

受験勉強もあるけど、小説に触れ続けよう。

そのためにはまず、文芸部を存続させないといけない。部長と一緒に幽霊部員も卒業してしまつたから、部活動認定の最低人数を下回ってしまったのだ。

さて、これから大変だ。部長はもういない。文芸部は俺一人だ。

今後のことを考えて歩いていると、雨があがつた直後だというのに、妙に明るいに気付いた。

ふと立ち止まり、空を見上げる。

雲の切れ間から姿を見せる陽の光が、空を仰ぐ俺を照らしていた。ときどき、桜の花びらが俺の視界を横切っていく。

俺はあの日の言葉を思い出した。

——こんなにキレイな空、見たことないよ！

いつの日か、桜舞うこの道を美咲と歩こう。

〈 f i n 〉



「こんにちは」

病室のドアを開けると、見慣れた白い部屋が目飛び込んできた。そこにあるのは見慣れた点滴と、これまた見慣れたパイプ椅子だけ。荷物はすべてロッカーに入っている。なんとも殺風景な病室だ。

「元氣だった？ 調子はどう？」

話しかけながら、パイプ椅子に腰をかける。

そのとき、勢いよく座ってしまった。ガタン、というパイプ椅子の悲鳴が病室に響く。はし

たない子だと思われただけでなく、座るときに音が立つほど太っていると想われたかもしれない。そう考えると、少しだけ恥ずかしかった。

「あ、あのね！ 私、部長になったの！」

一連の出来事を誤魔化すように、私は矢継ぎ早に言葉のマシガンをつ放した。

「でも大変なの。神崎部長、来週から大学生じゃない？ 文芸部の幽霊部員も部長と同学年の人たちだから、私だけになっちゃうんだよね……寂しいなあ」

そもそも、ちゃんと部員を確保できることができるのだろうか。「本が友達！」と素で思っている私は、あまり人と積極的なコミュニケーションをするのは得意ではない。新入生の部活勧誘なんてできるだろうか。

神崎部長は「金森美咲！ 君ならこの神崎王華の後任を安心して任せられる！」と太鼓判を押してくれたけど、私は不安で仕方がない。

ああ……憂鬱すぎる。

ノスタルジックな漫画の主人公よろしく、私は窓の外を見た。

そこには見慣れた景色が広がっていた。

青空は遠くの方まで続いている、遠くの空は水色に、さらにその奥は白く霞んで見える。鮮やかな空のグラデーションだった。

空の下には、いくつもの高層ビルやマンションが並んでいる。もっと窓に近づけば、桜の木

も見えるかもしれない。

ふと視線に気付き、自分の失態にはっとした。

「ぼ、ぼーっとしてごめん！ それに私ったら自分の話ばかりしちゃってたね。今日の主役は私じゃないのに、ほんとごめん」

私は慌てて鞆を開いてプレゼントを取り出そうとした。

「これ——って、ああっ——」

……うっかり手を滑らして、原稿を床にぶちまけてしまった。

ああ……憂鬱すぎる。

「ううっ、ほんとドジですみません……」

床に散乱した原稿を急いで回収して、ぐちゃぐちゃになったページ番号の順番を合わせた。

「……よし、これで大丈夫。あ、待たせてごめんね——春人！ 誕生日おめでとう！」

私は春人の顔を覗き込み、元氣よくお祝いの言葉をかけた。

春人の視線は、私の瞳を捉えて離さない。「年を取ったくらいで大げさだな」って訴えられたように感じた。

——その反応……なーんか、かわいくないなあ。

そう思ったので、私は浅はかな春人を小馬鹿にしたように「ふっ」と嗤ってみせた。その後、春人に「はいはい」と視線で言い返された……ような気がした。

「こほんっ」

わざとらしく咳払いをしつつ、プレゼントの説明をすることにした。

「今年の誕生日はね、スペシャルサプライズを用意したの……あつ」

春人の視線は、いつの間にか私が持っている原稿に釘づけになっていた。サプライズの誕生日プレゼントがバレた瞬間だった。

「こ、こほん。春人は今まで私の書いた小説、読んだことないでしょ？ 自分の小説を朗読するなんて恥ずかしいけど、きつと面白いから。ぜひ聞いてほしいの」

私は原稿に視線を落としたり。

そう——私は春人に感動してほしかった。

何かを感じて、それを表情に出して欲しい。

大好きな人の表情を変えたいって思ったから。

私は、私たちの軌跡を描いた小説を書いた。それに加えて、同じような境遇のカップルの話も書いて、それを作中作として位置つけた。私たちの物語に、もう一つの物語で味付けしたのだ。

この小説を読み聞かせて、春人が感動してくれるかどうかなんてわからない。それでも、やらないで後悔するよりも、やって後悔したほうがまし。

ねえ、春人。

アナタが笑ってくれなくなつてから、毎日が退屈なの。

世界は瞬く間に色を失い、モノクロになつてしまった。

呆れるほどに、アナタとの日常が恋しい。

感情はあるはずなのに、どうして表情だけが消え失せたのか。

元気に走り回ってなんて贅沢は言わないから。

もう一度笑って見せてなんて言わないから。

だから、お願い。

せめて、泣いてはくれませんか？

「タイトルはね『キミに捧げる物語』っていうの。わ、笑っちゃ嫌だよ？ ……読むね」
ありったけの想いを言葉に込めた。

『小さい頃から、私と水沢健二は一緒だった——』
祈るような気持ちで強く、強く——

キミに捧げる物語

作者 上村夏樹

第四回 「俺的小説賞」 応募作品 30 銀賞受賞作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。
無断転載は禁止しています。